

『センチメンタル・ジャーニー』 試論

河村 昭夫

I

旅先きでの見聞をもとにして、その土地の習俗風習をこと細かに書き綴るのが本来の旅行記であるとすれば、スターン (Laurence Sterne, 1713-68) のおよそ型破りな紀行『センチメンタル・ジャーニー』 (*A Sentimental Journey through France and Italy by Mr Yorick*, 1768) をわれわれは何と呼ぶべきだろうか。自らを「風雅な旅人」(Sentimental Traveller)⁽¹⁾ と称する主人公ヨリックは、あえて知識や進歩向上を求めて地球上の文明の進んだ国々を経巡ろうとはしない。また、名所旧跡を見物したり、新奇なものを探る「物好きな旅人」(Inquisitive Traveller) であることを拒む。⁽²⁾ そして、気随気儘に旅をするその先々で、おのれの関心をもっぱら人間に向けていく。

ドーヴァーの海峡を渡ってカレーの町に着いたヨリックは、町中を何一つ見物しないうちに、一人のみすぼらしいフランシスコ会の托鉢僧に興味をひかれる。この出会いに始って、カレーからモントルイユ、ナンボンを経てパリに至る旅の途中、そしてパリの町中で、彼の興味をひき、その優しい心をなごませ、時には悲しませたり、痛めつけたり、また時にはその心を怪しく掻き乱すのは、すべてゆきずりの人間である。それが、たとえば、先述の老托鉢僧や見目好い貴婦人であったり、道連れに驢馬の死をわが子のそれのように嘆き悲しむ老人やはた目にも痛々しい狂女であったりする。また、愛想のよい店屋の女房や色っぽい小間使でもある。

ヨリックはこうした旅先きでのほんのゆきずりの人に過ぎない男女とのかりそ

めの縁えにしの中に、矛盾と不合理を露呈させている人生の様々な断面を見出す。そして、その矛盾と不合理の間に浮き彫りにされる人間の姿を見ようとする。この作品はそうした人間観察によって惹き起こされるヨリック自身の心の揺れを跡づけていったもの——いふならば、彼の心の旅の記録である。作者があえてこれを紀行と名づけたのもそうした意味を含めてのことであろう。では、このように様々な色合いをもった対象を観察して、ヨリックは人間のどのような姿を見出したのだろうか、小論はその点に探りを入れようとするものである。

註(1) *The Complete Works and Life of Laurence Sterne*, ed. Wilbur L. Cross (New York, 1970), Vol. III: *A Sentimental Journey*, p. 34. 以後 *Works* として引用。

(2) *Ibid.*, pp. 36-37.

II

この紀行の表題の「センチメンタル」という形容詞が、今日使われているような、安価な涙を連想させる抑制のない情緒の過剰を意味する用語でないことは周知の通りである。スターンの時代には、この語はそのような下落した意味はなく、「洗練された、高尚な感情を表わしている」(exhibiting refined and elevated feeling) という好ましい意味を持つ形容詞であった。だから、ヨリックが自分を「センチメンタル」な旅人と呼ぶとき、それは情趣ゆたかで、洗練された心情の持主の「風雅な」旅を意味した。そのことは、この作品のいたるところに見られる人情味あふれる男女との出会い、そしてそれを語る陰影に富んだ語り口が醸し出す情緒の揺曳が如実に示してくれる。

まずわれわれは、旅のはじめにその目的についてヨリックが語る言葉を聞こう。

人間が幸福を分けあうのに、そしてまた、あらゆる国、あらゆる時代に、ただ一人で背負うには重すぎる苦しみを共に分けあうのもっともふさわしい相手を、自然はただ母国においてのみ人間に与えてきた。事実、われわれは、

時には自然が設ける境界線を超えて、自分の幸福の範囲を広げていく力を、不十分ながらも授けられている。しかし、言葉が通ぜず、人とのつながりもなければ、頼るものもない、しかも、教育、風習、習慣が違っているので、母国をはなれて自分の気持をつたえるには、いろいろと多くの障害があり、応々にしてそれはまったく不可能になることさえある。⁽¹⁾

このように「母国をはなれた旅人にとっては必ず分が悪くなる」⁽²⁾ のを承知で、ヨリックはあえて「情愛取引」(sentimental commerce)⁽³⁾ のため大陸へと旅立っていく。

最初の話に出る老托鉢僧との嗅き煙草入れの交換にいたるいきさつ、雇い入れた従者ラ・フルールとの主従の心の通い、あるいは籠に囚われた椋鳥の境遇から囚人の身の上を思い自由を願うエピソード等、そこに見られるヨリックの濃やかな情愛は、大陸へ出かけてまでも「情愛取引」の実現に努めようとする彼の愚かしくもきまじめな態度とは切り離せない。それは単なる物見遊山の旅人が示す受け身の姿勢ではない。そこにはたえず彼の側から働きかけようとする意識が認められる。

ダンからピアシーバまで旅をして、これはまったく不毛の地だ、と嘆いておれる人を私は憐れむ——なるほどその通りだ。が、その土地にできる果実を育てようとならない人間にとっては、世界中どこもみな同じように不毛の地だ。愉快そうに手を打って私はいった。はっきりいうが、たとへ砂漠の中にいたとしても、わたしなら何か自分の愛情を呼び覚ます手立てをそこに見つけようとするだろう……⁽⁴⁾

こうして、ヨリックの行動はしばしば能動的となり、思い入れたっぷりで相手に接することになる。そして、彼の意識が美しいものに向けられるとき、『トリストラム・シャンディ』(*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*, 1759-67) 以来の作者の本領が発揮され、艶めいた、だがいささか滑稽な情の交流

の場が出現する。

オペラ・コミックへ行く道順を尋ねに店屋へ入ったヨリックは、美しい女房の気を逸らさない愛想のよさにほだされ、人の親切心は脈をとればわかる といって女の手首をにぎり、その脈搏を亭主の前でぬけぬけと数える。そのあげく、要りもしない手袋を買わされる羽目に陥る。あるいはまた、主人の使いで訪れて来た美しい小間使と部屋の寝台に坐り込み、財布にまつわる卑猥なほのめかしをまじえた会話をかわす。そうして一種快くて、しかも多少やましい気分ひたり、悪魔の誘惑に身をさらすことに一時の楽しみを見出す。こうした場でのヨリックには、愚かしい状況に追い込まれていく自分を楽しむだけのゆとりがある。相手の女に対する微妙な感情に身をまかせ、心の中で行きつ戻りつする彼の姿は、一見頼りなげであり、おかしい。そして、そこに醸し出されるものは、優しい、繊細な、そして、うつろい易い情緒である。

だが、彼の意識が衰れなもの、か弱いものに向けられるとき、しばしば指摘されるように、作者の筆致は情緒過剰となる。先きの老托鉢僧が世を去ったことを知り、その墓を訪れるヨリックは思い出にふけり、嘆き悲しむ。

その墓のほとりに坐って、彼がくれた小さな角製の煙草入れをとり出し、墓の頭のところに用もないのに生えているいらくさを一二本抜きとったが、そうしたことが何もかもわたしの心を強く打って、あふれ出る涙にむせんだ——それにしてもわたしは女のように弱々しい、だから世間の人達にお願いする、どうか笑わずに、このわたしを憐れんでほしい。⁽⁴⁾

また、ムーラン附近で出会った狂女マリアに憐れみの涙を流し、別れぎわに、

さようなら、幸いうすき衰れな乙女よ！——見知らぬ者が憐れみをおぼえて、その旅の道すがらに、お前の心の傷に今そそぎかける油と酒を吸いとってくれ——二度もお前の心を傷つけ給うた神のみがその傷を永久に癒せるのだ。⁽⁴⁾

と祈らずにはおれない。

このような場面に見られる感傷性は、たとえば、道連れに驢馬を死なせた老人が自分の責任だと告白するのを聞いて、「ああ、世の人達よ、恥じ入るがいい——」⁽⁷⁾と叫ぶ教訓じみた詠嘆とともに、われわれ読者の心をとまどわせる。これらの言葉はいわゆる感傷主義ときめつけられ、また、取りつくろった作者の偽善と受けとられかねないものを含んでいる。たしかにそれは、『エライザへの書簡』(*Journal to Eliza*, 1773) に認められる感傷性と共通した作者の感傷過剰と考えられないこともない。⁽⁸⁾あるいは、死の影におびえる病弱者の異常心理の現われと見ることも可能であろう。⁽⁹⁾だが、問題は、この度が過ぎるとも思える感傷性をわれわれがどう受けとめるかということである。さらにいえば、この感傷的な言葉の背後に作者の何か意識的なものが読みとれないだろうかということである。

註(1) *Works*, Vol. III : *A Sentimental Journey*, pp. 31-32.

(2) *Ibid.*, p. 32.

(3) *Ibid.*

(4) *Ibid.*, p. 98.

(5) *Ibid.*, p. 68.

(6) *Ibid.*, p. 391.

(7) *Ibid.*, p. 142.

(8) 次章でふれる恋愛事件の相手あるエリザベス・ドレイパー夫人と交した日記で、彼女との悲しい別離の後のお互いの起居動静を記したものであるが、作者のやるせない思いが綿々と綴られている。

(9) 元来が蒲柳の質であり、大学時代すでに嗜血の経験をしている。その後の多忙な作家生活の負担も手伝って、しばしば嗜血を繰り返すことになる。この作品も病魔の隙を見て執筆されたもので、完成後わずか三ヶ月あまりでこの世を去った。

III

この紀行が書かれるにいたった経緯は、一つには当時流行していた旅行記に対抗するためであったという。さらに、作者が1662年春の大陸旅行の経験をもとに

した印象記的なものを『トリストラム・シャンディ』の第7巻として64年に公にした。これが非常に好評を得たのに刺戟されたこともきっかけとなったようである。ところで、その『トリストラム・シャンディ』の第1巻が世に出て以来、読者の好評を博し、作者自身一躍文壇の有名人名となった。が、その反面、作品のいたるところに見られる思わせぶりな性的言及やユーモアが、聖職者にあるまじきこととして、ことに宗教界から激しい非難を浴せられた。こうした事情が、この紀行を書いている作者の心のこだわりとなっていたことは否定できない。

作品を執筆中、スターンは友人夫妻、および知人に送った手紙の中で、いかにも自分の立場を弁明するかののように次のようにいっている。

……この作品における私の意図は、われわれに世界および仲間の人間を、われわれがいま愛している以上に愛することを教えることです。——だからこの作品は、そんなことには非常に助けになるああした優しい情熱や愛情に、もっとも多くとられるのです。⁽¹⁾

この作品が純潔の書と考えられないのならば、それを読むものこそ憐れむべし、なぜならば、彼等は実に怪しい空想をいただいているにちがいないから。⁽²⁾

ことに前者は、互に知り合ってからスターンが死ぬまでの1年あまり、友誼を尽した友人への手紙である。これらの言葉は、多少の取りつくろいはあったとしても、まず額面通りに受けとってよいだろう。たとえ一部の人達からにもせよ、自分の作品を卑猥だと攻撃されたことは、彼にとって無視できない事柄であったと思われる。

今一つ考慮すべきこととして作者の個人的事情がある。この異端児の田舎牧師が一大奇書『トリストラム・シャンディ』の作者として世に出るまでの生活はかなり波瀾に富んだものであった。父を早く失った彼は、宗門の頭職にあった叔父から経済的援助を受けていた。この叔父の僧侶としての権勢欲やその心の陋劣さ、

また、彼を中心とするヨークの寺門の権勢争いの愚劣さ、さらに、妻の財産を当てにして絶えず金の無心をする生母の心根の卑しき——こうしたわずらわしい周囲との関わりを通して、作者は人間の愚劣さをいやというほど味った。また、かつては2年にわたる求愛ののちに結婚した妻ではあったが、彼女が虚弱であったこと、それに彼女が夫と同様に感情の起伏が激しい上に、わがままであったことも手伝って、二人の仲は気まづくなっていた。「どうしてか、いつもより一層女房が鼻につく。——そして僕に悪魔が取りついて、やたらと僕を都へと誘う」⁽⁶⁾と、ロンドンの華やかな社交界にあこがれて友人に書き送った作者の心は、何ともやりきれない思いで苛立っていた。

1760年始めに『トリストラム・シャンディ』第1巻および第2巻が出版されると、世間はこの奇書にあきれはて、かつ魅了されて、作者は一躍ロンドン社交界の話題の人物となる。老年期を前にしてやっと手にした文人としての成功と、社交界の寵児としての華やかな生活は、彼を有頂天にさせた。満たされることがあまりにも少なかったそれまでの年月を考えれば、彼がいささか異様と思えるほどに都の社交界の生活にのめり込んでいったとしても無理からぬことであった。

だが、作者としての多忙な執筆生活と社交界での活躍は、生来蒲柳の質であった彼の肉体をますますむしばんでいく。この作品の素材となった二度にわたる大陸旅行も、病を養うことが目的であった。その後、1767年のはじめに、彼はその人生に最後の花を添えるかのような激しい恋をする。それは苦悶をともなう経験であった。自分が牧師であることを忘れ、年甲斐もなく、娘リデア (Lydia) と年の違わぬ人妻エリザベス (Elizabeth Draper) との恋に半狂乱になるが、わずか4ヶ月しか続かず、身の切られる思いで別れることになる。その時、作者は55才、この世を去る1年前のことであった。彼女と別れた後2ヶ月ほどして、この紀行の執筆にとりかかっている。

こうした一連の事実を追うとき、われわれは、作者スターンが、波瀾に富んだ人生を送った人間にまますみやかなるような激情の持主であったことを知る。彼は自分の感情の激するがままに行動する直情の人であり、愛憎の念がひとしお強かった。

『センチメンタル・ジャーニー』に見られる感傷多過は、そのような激情の持主である作者が、語る内容に動かされて、思わず見せた感情の揺れと考えられないこともない。

だが、われわれは、一見感情の揺れに身をゆだねているかに思える作者の背後に、自分のそうした姿をおかしそうに眺めている今一人の作者を見出すのである。彼は知的な目で、自分を含めたこの現実の世の中を、そして、そこにうごめく人間の有様ありようをつぶさに眺め、その一つ一つをあるがままに人生の絵模様として受けとめようとする。この姿勢こそ、作者の心の底に流れる激情とは一見無縁であるかのように、何の屈託もなく、気儘な旅を続ける主人公ヨリックのものである。彼は、虚構の秩序の上に安定している世間に、おそらくは、反撓をおぼえながら、その様々な事象がつけている「見せかけ」の仮面をあえて剥ぎ取ろうとはしない。むしろ、その「見せかけ」の一つ一つにかかづらって、止めどもなく不協和音をたてつけ、われわれ読者の笑いを誘う。この軽妙な笑いは、観照者である作者の内部で、一体どのように昇華されたものなのだろうか。

註(1) *Works*, Vol. V: *Letters Part II*, pp. 191-192.

(2) *Ibid.*, p. 198.

(3) *Works*, Vol. III: *Letters Part I*, p. 185.

IV

カレーの町に上陸したヨリックは、その直後に例の老托鉢僧に会い、最初はつれない態度をとるが、それにもかかわらず相手が示した心優しい善意に心暖まる思いをする。それから、旅行用の馬車を手に入れるために、宿の亭主に案内されて、馬車庫に行く途中で、物腰のしとやかな貴婦人と一緒になる。その婦人に心をひかれたヨリックは、亭主が座をはずした間に、彼女の手をとりながら、胸をときめかし、恋をかたる。その後、心ならずも彼女と別れたあと、町の時計が時刻を告げるのにふとわれに戻り、今までの一連のことが、カレーに着いてわずか1時間ばか

りの間の経験に過ぎないことに気づく。そして、それが自分にとって、風雅な旅の目的になつたものだと考える。

どんなことにもその心を楽しませるような人、その旅の道すがら、時と場合につれてたえず出現してくるものを目にとめて眺められるために、およそ然るべくつかまえられるものは何一つとり逃すことのない人、そうした人には、人生のこの短い時間に何と数多くの経験がつかみとれることだろう。——⁽¹⁾

こうして、彼は人間に対するあくことのない興味を、しかも、とらわれない姿勢で、対象に向けていく。あなゆる経験が自分の心の反応を試そうとする試煉であり、また、自分の心に活力を与えてくれる手がかりであると、素直に受けとめ、その結果はあえて問わない。このように、行動者としては積極的な、だが意識は観照的な人物をわれわれが想像するとき、たとえば、先き上げた狂女マリアに悲しみの涙を流すヨリックの姿が、また別の色合いを帯びて見える。思い入れたっぷりな表情を連想させるその姿になんとなく滑稽味が生じることによりわれわれはあらたな興味をおぼえる。

わたしは娘のそばに坐り込んだ。そして、マリアはわたしがハンカチでその流れれる涙を拭きとるがままにさせた。——わたしはそれから自分の涙でハンカチを濡らした——それからまた彼女の涙で——さらにまた、わたしの涙で——それからまたわたしは彼女の涙を拭いてやった——そして、そうしながら、わたしは心のうちに、物質と運動の如何なる結合からもたしかに説明が不可能な、えもいわれぬ感動をおぼえた。⁽²⁾

ここには、涙ながらに語られるべき場に作者の意識の介入——「えもいわれぬ感動」という一言ですむものを、「物質と運動の如何なる……」と理詰めに語ることの滑稽な効果を期待する意識の介入が見られる。さらには、もの悲しい情景にもか

かわらず、シーソーのような繰り返しを微笑ましく眺める目を感じる。それは、店屋の女房の愛嬌にさそわれて、不要の手袋を買わされたあげくに、馬鹿でいねいなお辞儀をしていそいそと店を出ていくヨリックをおかしそうに見送る目である。また、美しい小間使と寝台の上で微妙な会話をかわしたあと、「もし自然が優しい心という織物を、愛や情欲の糸も幾本かそこに交せて織り上げているなら、その糸を抜きとればきっと織物全体を裂くことにならないだろうか？」⁽⁶⁾と、掻き立てられた情熱を抑えることへの不満と疑いの言葉を創造主に投げかけるだけで、何事もなく部屋を出て行く男を、面白がって悪戯っぽい目で眺めている目でもある。

作者がいうところの、「どんなことにもその心を楽しませるような人」であるためには、まず、何事にも促われない心が必要である。「旅の道すがら、時と場合につれてたえず出現してくるものを目にとめて、」それを「何一つとり逃がすことのない人」であるためには、緻密な観察者であることが要求される。こうして、客観化し、意識化された観照の姿勢は、この作品を通して失われることがない。ヨリックが、そして、作者が示す滑脱はここから生じる。

ヨリックは単なる傍観者ではない。どんな瑣末なことであれ、世間のあらゆることにかかわっていく。かかわりながら、その対象に泥むことをさける。むしろ、その対象と対立し、対立しながらそれを超えようとする。彼は旅先きのゆきずりの人間とかかわって、愛し、感動し、悲しみ、憤る。しかも、一瞬後には、世間にかかずらう自分を意識し、自分の中にやみがたく巢食っている世俗性とも対立し、それを超えようとする。こうして、常に否定的であるヨリックは、もはや、なまなかの風雅の域にはとどまれない。どこまでも風雅に徹しきらずにはおれない。そして、風雅に徹しきることの狂性に駆り立てられて、定住することがないままに旅を続ける。

旅先きでヨリックがかかわる対象には、ほとんど例外なく、思わぬ結果が待ち受けている。いわゆる「見せかけ」の秩序に寄りかかって存在するそれらの対象は、偶然の介入を受け、また運命のいたずらで、完結をみることがない。そして、一瞬の定住をさけるヨリックと対象とのかかわり方そのものもまた完結をみない。

ここにもまた、『トリストラム・シャンディ』に見る「中断されること」(*Interruptus*)⁽¹⁾の主題が形を変えて繰り返されている。最後のエピソードで、宿屋での男女三人相部屋という微妙な状況を大まじめ、かつ詳細に説明したあと、「そうなったものだから、手をさしのべて、わたしが捉えたものは、女中の……」⁽⁵⁾という形で筆を措いていることは象徴的である。この作品そのものが、そして、人間にかかわる一切が、中断されたものだ、と作者スターンはいいたいのであろう。

註(1) *Works*, Vol. III : *A Sentimental Journey*, p. 97.

(2) *Ibid.*, p. 382.

(3) *Ibid.*, p. 315.

(4) Frederick R. Karl, *The Adversary Literature* (New York, 1974), p. 213.

(5) *Works*, Vol III : *A Sentimental Journey*, p. 417.